論文

幼児教育学科におけるピアノ教育の方法試論

An essay on piano education in department of Pre-Elementary education

田中 節夫 [1)]

Sadao Tanaka

キーワード：目的に沿った教育内容， 実践的な教育， 学生の能力に応じた教育

はじめに

今日、幼稚園教諭・保育士の養成を行う各種教育機関に入学する学生の大半はピアノの初心者で多くの不安を抱えており、山陽学園短期大学（以下、「本学」という）幼児教育学科においても同様である。とりわけ短期大学では、2 年間という短い修業年限の中で、幼稚園や保育園等の幼児教育の現場で求められる能力を習得させなければならない。対して、本学において従来行われてきた教育方法は、一般的なピアノ教育に近い手法（ピアノ教室等で広く展開されている手法）であった。残念ながらこの手法では、実際の幼児教育の現場で必要とされる弾き歌いや簡単な伴奏付け等の実践的な能力を学生が習得するのは困難である。

本論文は、筆者が本学幼児教育学科に赴任以降、教育方法の転換を試みた過程と内容および成果を纏めたものである。ピアノ初心者の学生が教育現場で必要となる能力を短期間で習得することに主眼を置き、従来の教育方法の問題点を明らかにし、幼稚園教諭・保育士養成を行う短期大学におけるピアノ教育の方法を提案する。

1.幼児教育の現場で求められる能力とは

筆者が複数の幼稚園や保育園の園長に対してヒアリングを重ねたところ、幼稚園・保育園で求められているピアノ演奏の能力は、以下のような内容であった。単にピアノを上手に弾くことではなく、弾き歌いの能力が重視される。すなわち、ピアノを弾きながら歌うことができ、幼児に興味を持たせ、子どもたちと一緒に音楽を楽しむことができる能力である。幼稚園・保育園では、音楽を取り入れた活動が多く見られる。簡単な挨拶の歌、季節の歌、行事の歌、童謡などを、幼児の表情や動きなどの様子を見ながら、弾き歌いをし

1) 山陽学園短期大学　幼児教育学科

たり、伴奏を自分で工夫したりすることが求められるのである。つまり、そのような能力を養成することが幼児教育学科のピアノ教育の目的であり到達目標だと言える。演奏の技術はピアニストのような高度なレベルを求められているわけではない。

一方、多くの学生は、“幼稚園教諭や保育士を目指すならピアノを弾けなければ”という固定観念を持っており、ソナタやソナチネなどの高度な技術を求められる演奏をイメージしてしまい、最初から尻込みしてしまいがちである。実際に必要なピアノの演奏能力は別のものである、という事実を学生に理解させることが重要であり、これはピアノ教育に携わる教員も十分に理解しておかなくてはならない。

2.現状と問題点の整理

2-1　本学の従来の教育方法

表１は､本学が長年にわたって行ってきた従来の教育内容･方法をまとめたものである。本表の内容は、筆者が本学着任時に、幼児教育学科のピアノ教育に携わる教員へのヒアリング、アンケート、また、学生からの聞き取りで得られたものである。
また、参考までに我が国における一般的な導入期のピアノ教育の概要についても隣に並列した。

	本学の従来の教育概要（初心者の場合）	（参考） 一般的な導入期のピアノ教育
授業 形態	授業時間 90 分間 個人レッスン 20 分間 ＋自主練習 70 分間 ※名簿順にクラス分けを行い､担当教員を割り当てる。	多くは個人レッスン
使用 教本	・バイエル教則本（以下、「バイエル」という） ・バイエル終了後は、ブルグミュラー：25 の練習曲集を用いる。 ・こどものうた 200、続こどものうた 200	・バイエル等の入門教本 ・バイエル終了程度になると、ブルグミュラー：25 の練習曲集を用いることが多い。
内容	バイエルのレッスン…15 分間 弾き歌いのレッスン…5 分間 ※弾き歌いは､バイエルがある程度進んでから開始。	・バイエル等の入門教本、併用曲集等を用いたレッスン ・指の訓練を導入期から取り入れることもある。 ・楽譜の読み方、音楽の基礎知識などの学習をレッスンで取り入れることもある。

表１　本学における従来の教育概要

二つの項目を比べてみると、本学幼児教育学科でのピアノ教育方法は、一般的な導入期のピアノ教育の内容と近い形であったことがわかる。幼児教育の現場で必要となる弾き歌いについては、確かに従来の内容においても普段の授業の中で取り組まれてはいた。しかし 20 分間の個人レッスンのうち弾き歌いに充てる時間は 5 分間のみの配分であり、弾き歌い重視型の授業であるとは言い難い。期末に行う試験においても弾き歌いは課されていたが、歌うことよりも弾くことが重視される評価システムであった。学生はこうした方針に従って練習や授業を重ね卒業に至るため、結果として弾き歌いを重点的に取り組むことは難しかったであろう。

初心者の学生がレッスンで用いる教本はバイエルであり、1 年次における単位認定要件のひとつはバイエルの進度が一定基準に到達することであった。授業は、90 分間の授業時間のうち、20 分間を個人レッスンとし、残りの 70 分間は練習室での自主練習というスタイルであった。

2-2　従来の教育方法の問題点

前述した従来の教育方法によって学生が習得可能な主な能力は、ピアノ演奏の初歩的な技術や独奏曲の演奏能力ではなかろうか。弾き歌いや伴奏付けなど実際の幼児教育の現場で求められる能力と異なっている。実際、筆者が学生の教育実習先や卒業生の就職先である幼稚園・保育園の複数の園長に伺った話では、弾き歌いが困難である学生や卒業生が多いことがわかった。また、バイエルやソナチネなどよりも、季節の歌や行事の歌などの弾き歌いをカリキュラムの中で多く扱うよう要望があがった。

では、なぜ幼児教育学科においてこのような教育方法が長く展開されていたのであろうか。主要因として考えられる点は、ピアノ教育に従事する教員は、音楽を専門的に学んだ経歴を持つ者が多いため自身が接してきた教育手法、つまり演奏家養成のための教育方法に傾きがちであったことが考えられる。そういった観点から考えて、幼児教育学科のピアノ教育の目的や在り方、また現状と求められる能力の乖離についてまずは教員側の共通認識を図る必要があった。

3.教育方法の転換

3-1　仮説に基づく教育計画

幼児教育学科におけるピアノ教育の目的・到達目標は、実際の幼児教育現場の求める能力に合致したものでなければならないため、その実現には従来の教育方法からの大きな転換が必要である。新しい教育方法の方針は、幼児教育の現場で求められる弾き歌いの能力を本学のピアノ教育において優先的かつ重点的に取り組むことで、必要とされる能力を養成しようとするのが狙いである。教育方法の転換を図ることで、本学での教育内容が現場のニーズに直結し、現状の問題点の改善が見込まれる。学生は授業で学ぶ内容の有用性を実感することで学習および練習意欲の向上にもつながるのではないかと考える。

以上の仮説をもとに、本学幼児教育学科の初心者の学生を対象とした新しい音楽教育の実践計画を立案した。表 2 はその概要である。

授業形態	授業時間 90 分間 クラス全員参加で行う 90 分間のグループレッスン ※入学時に学生に調査を実施し、ピアノの経験やレベルを参考にクラスを分ける。
使用教本	・こどものうた 200、続こどものうた 200 ・弾き歌いの楽譜　初心者用に編曲した簡易伴奏の楽譜 ・バイエルは補助的に使用する。
内容	・弾き歌いを重点的に取り組む。 ・クラスの学生が交代で弾き歌いの曲を演奏し、教員が指導する。 ・実際の教育現場を想定したロールプレイング形式の演習も行う。 ※バイエル等、独奏で演奏する曲もグループレッスン形式で指導する。

表 2　新たな教育方法の概要

新たな方針として、単にレッスン内容や教本を弾き歌い中心に変更するのみではなく、指導効果を高める上でも、実践的な演習を展開する上でも、グループレッスンの形態が望ましいと考え、従来の個人レッスンからグループレッスンへと授業形態の全面的な切り替えを策定した。

グループレッスンでは、学生は交代で弾き歌いの曲を演奏し教員が指導を行うが、演奏している学生以外も同じ教室で聴講するため、一人の学生に対する指導内容をクラス全員が共有可能である。学生は自身が受けた指導内容だけではなく他の学生の指導内容を参考にして練習に活かすことができる。また、特に初心者の学生に対する弾き歌いの指導では、右手・左手・歌のように細分化して練習させることも重要となるが、グループレッスンでは、ピアノを弾く学生と歌う学生に役割を分けて演奏することや、右手と左手のパートを学生同士で分担して弾いてみるなどの練習も取り入れることが可能である。

さらに、教育実習や就職試験、卒業後の幼稚園・保育園での就業等を視野に入れ、実際の場面を想定したロールプレイングによる実践形式の演習を授業の中で積み重ねることができる。学生が幼稚園の先生役や園児役となり演奏したり歌ったりしながら教育実習のシミュレーションを行い、学生同士で意見を交わす。学生が主体的・能動的に参加する演習形式の授業を通じて、弾き歌いの能力の向上だけではなく、人前で演奏することや話すことに慣れるという狙いもある。

以上の教育方針をもとに表 3 のとおり 2 年間の指導計画を策定した。

1 年次		
前期	4 月	【ピアノ演奏全般のための導入教育】 ・ピアノの鍵盤と音符の位置関係、基本的な運指（指使い） ・音楽理論の基礎（必要最小限のもの） 【弾き歌いのための導入教育】 ・左手：和音（Ⅰ,Ⅳ,Ⅴの 3 種類の和音） ・右手：ごく簡単なメロディー（1 つか 2 つのポジションで弾けるもの） ※導入段階では歌わずに、右手でメロディーを、左手で和音を演奏することを目標とする。
	5 月以降	【弾き歌い】 ・ピアノを弾きながら歌う練習を開始する。（平易な弾き歌いの曲） ・左手の伴奏パターンを増やす。（分散和音など） ・春や夏に実際の教育現場で用いられる季節の歌・挨拶の歌・行事の歌等、教育実習時に適切な曲を多く選び、弾き歌いに慣れるよう指導する。
	7 月	期末試験
後期	10 月以降	【弾き歌い】 ・秋や冬向けの弾き歌いの曲を数多く選曲し、練習とグループレッスンでの演習を重ねる。 【自由曲（独奏曲）】 ・弾き歌いの曲と同程度のバイエル後半の曲を与え、演奏能力の向上を図る。
	1・2 月	・上記内容に加え、2 年次の教育実習に向け 5・6 月を題材にした曲の復習を追加する。
	2 月	期末試験
2 年次		
前期	実習前	【弾き歌い】 ・教育実習に向けた実践演習。実習時期にあたる季節の歌や行事の歌の弾き歌いの演習を重ねる。 ・教育実習先より指定される課題曲は、クラスの学生全員で実際の教育現場を想定した演習を行う。
	教育実習	
	実習後	【弾き歌い】 ・教育実習での個々の反省点や課題をクラスで共有し、継続して演習形式での弾き歌いの指導を行う。 ・就職試験対策として平易な曲の初見演奏練習を取り入れる。
	7 月	期末試験

後期	10 月以降	【弾き歌い】 ・就職試験や卒業後の就業に向けた実践演習 【自由曲（独奏曲）】 ・就職試験で課される独奏曲等
	2 月	期末試験

表 3　2 年間の指導計画

上記の指導計画に沿って教育を行うことで、初心者の学生であっても数多くの弾き歌いの曲に触れ、練習し、グループレッスンの場で演奏することで大きな経験となり、実践的な力を習得できる。また、独奏はバイエル後半程度の実力がつくことを想定している。各期末に行う試験では、弾き歌いの配点に重きを置き、大きな声ではっきりと歌うことや、余裕をもって弾き歌いができること、歌詞の意味を理解して歌うこと等を評価のポイントとする。

次項では、初心者の学生を対象とした教育方法について、特に入学直後の導入教育に焦点を絞って論述する。

3-2　初心者の学生への具体的な教育方法

(1)鍵盤に手を配置する

初心者の学生には、右手・左手ともに、5 本の指を鍵盤（白鍵のみを用いる）に置いて音を鳴らすことから指導を開始する。C 音～G 音までの 5 音（ド・レ・ミ・ファ・ソ 《以下、音名はコードネームとの混同を避けるためイタリア音名で記す》）の各音について、左手は 5（小指）・4（薬指）・3（中指）・2（人差し指）・1（親指）の指、右手は 1・2・3・4・5 の指を鍵盤にのせる。そのポジションで固定し、右左同時に、同じ指（1-2-3-4-5 の順）で弾くことで左右対称、反進行の音型を弾くことができる。次に、右は 1-2-3-4-5、左は 5-4-3-2-1 の順で左右同時に弾くよう指導すると、ド・レ・ミ・ファ・ソをユニゾンで弾けるようになる。

(2)弾き歌いに向けての導入教育

①右手（メロディー）

導入段階では、手の移動を伴わずポジションを固定して弾ける曲が適当である。ハ長調のド・レ・ミ・ファ・ソの 5 音のみで一曲を通して演奏できる曲の例として、ぶんぶんぶん、ちょうちょう、チューリップ等が挙げられる。

②左手（和音による伴奏）

左手の主な役割はメロディーを伴奏し和声を添えることであり、まずは主要な和音を指導する。初心者の学生が最初に覚えるべき和音は、Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ（Ⅴ7）の主要三和音であり、これらの和音を使うことで、ほとんどの平易な曲が弾けることを実感させる。

※①②とも、導入段階ではハ長調のみを扱う。

ここで基礎的な音楽理論も合わせて指導するが、初心者の学生であることを考慮する必要がある。専門的な理論や知識は、学生の負担となり苦手意識を増強させるおそれもある。平易な曲の弾き歌いのために必要と考えられる最小限の音楽理論は以下の内容である。

ア　Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ（Ⅴ7)）の主要三和音の構成音と和音記号
イ　長三和音、短三和音、属七の和音の知識
ウ　調の知識（最初はハ長調・ヘ長調・ト長調・ニ長調のみで十分である）
エ　C・F・G（G7）等のコードネーム

上記アについて補足しておくと、ハ長調において、Ⅳの和音は基本形（ファ・ラ・ド）ではなく、第二転回形（ド・ファ・ラ）を用いる。Ⅴの和音も基本形（ソ・シ・レ）ではなく、第一転回形（シ・レ・ソ）を用いる。またⅤ７の和音を用いる場合、これも基本形（ソ・シ・レ・ファ）ではなく、（第 5 音を省略した）第一転回形（シ・ファ・ソ）を用いる。これらは、理論として理解させるのではなく、ピアノを弾いて指で覚えさせれば良い。和音で弾くのが難しい場合には、最低音を弾くだけでも良い。運指については表 4 にまとめた。

和音記号（ハ長調）	コードネーム	構成音	運指（左手）
Ⅰ	C	ド・ミ・ソ	5・3・1
Ⅳ	F	ド・ファ・ラ	5・2・1
Ⅴ	G	シ・レ・ソ	5・3・1
Ⅴ7	G7	シ・ファ・ソ	5・2・1

表 4　導入段階で指導する和音の種類と運指

まずは上記の和音をひとつずつ掴めるように練習させる。次に、これらの和音を組み合わせて表 4 に示した運指で連続して弾けるように指導するが、標準的な和音進行である以下のパターンを用いる。（括弧内はコード進行）

・Ⅰ－Ⅳ－Ⅰ　（C－F－C）
・Ⅰ－Ⅴ－Ⅰ　（C－G－C）
・Ⅰ－Ⅳ－Ⅰ－Ⅴ－Ⅰ　（C－F－C－G－C）
・Ⅰ－Ⅳ－Ⅰ－Ⅴ7－Ⅰ　（C－F－C－G7－C）

上記の左手の和音進行を習得することで童謡や季節の歌のほとんどが弾けることを実際の曲で例を挙げて示す。

②の項で挙げた知識は、机上論（講義形式）ではなく、実技演習の中で童謡などの曲を弾きながら教示するのが効果的であろう。

なお、音楽理論の入門書等では、長三和音や短三和音と合わせて増三和音・減三和音・長七和音・短七和音等の和音を取り上げているものが多いが、これらの知識は導入段階では不要である。幼児教育の現場で用いられる童謡や季節の歌にこのような和音が出てくるのは極めて稀だからである。移調についても、当段階では困難を伴うため指導しない。後にハ長調に慣れ、少し余裕をもって弾けるようになった段階で、ヘ長調・ト長調・ニ長調程度にとどめて移調奏を取り入れることが効果的と思われる。これら 3 つの調性であれば、ハ長調と同じ指使いを用いることができるからである。

③両手演奏のための予備練習

両手演奏への準備として、グループレッスンの場を活用して、学生同士がペアを組んで、片方の学生が上記①のメロディー（右手）を、もう片方の学生は上記②の和音（左手）を演奏させる。当段階では、左手の和音は 1 小節に対してひとつの和音（全音符）を用いるのが良いであろう。初心者の学生の多くは、両手で演奏することに困難を伴うため、このような予備練習は、両手で演奏したときのイメージや和音が変化する感覚をつかむことができるため効果的である。

④両手（メロディーと和音）

上記①のメロディー（右手）と②の和音（左手）を両手で演奏させる。初心者の学生の最初の到達目標であり、入学後　1 ヵ月程度で達成できるものと想定している。また、当段階を終えたら、バイエルを補助的に使用する。バイエルの初歩程度の実力が習得できていることを学生に実感させる。

(3)弾き歌いの指導

①歌

上記(2)の[メロディー（右手）と和音（左手）]の形に歌うことが加わる。まずは右手で旋律を弾きながら歌う練習を取り入れる。歌詞で歌う前の予備練習として、音名で歌いながら弾くこともひとつの方法である。また、左手の和音を弾きながらメロディーを歌う方法も提示する。

②左手（和音から伴奏へ）

和音での演奏に慣れてきたら左手の和音を伴奏形へ発展させる。まずは分散和音が良いであろう。例えばド・ミ・ソの和音であれば 3 つの音を同時に弾くことから、ド-ミ-ソ或いはド-ソ-ミ-ソと 1 音ずつ順に弾く形にする。学生の進度に合わせて順次他の伴奏形も提示し、左手の伴奏形はバイエルも参考にするよう助言する。有名なピアノの独奏曲でも同じような伴奏形が使われていることを示すと理解が深まる。

①や②の初期段階においても、グループレッスンの中でペアを組んで演奏させる。片方の学生が①の[歌と右手演奏]を、もう片方の学生が②の[左手の伴奏]を担当し、一緒に演奏することで、歌うことや伴奏することに少しずつ慣れ、ひとりで弾き歌いするための良いステップとなる。

③右手（メロディーの音域の拡張）

当面、右手は歌のメロディーを単旋律で演奏することを基本とする。これまでは、手のポジションを固定して演奏できるものに限定していたが、次の段階として 2 つのポジションで弾ける曲、さらに 3 つのポジションを使う曲へと順次音域を広げる。ポジションは基本的に 5 本の指を楽に鍵盤上の置ける位置を選択する。どこでポジションを変えるかは、レッスンの中で教員が指導する。

弾き歌いの指導にあたっては、教員が選曲を行う。その際、誰もが知っている童謡や季節の歌を選ぶ。馴染みのある曲を練習するほうが練習の負担が少なく、また、楽譜を読めない学生も次第に楽譜の音符と実際の音が一致してくる。

(1)～(3)で示した各段階を経て、弾き歌いの基礎を確立させる。以降は、幼児教育の現場で用いられる曲をできるだけたくさん練習し、演習形式の授業の中で演奏する経験を重ねることで曲のレパートリーを増やし、弾き歌いの演奏能力の向上を目指す。その過程の中で、初心者の学生もバイエル相当の演奏能力を習得でき、就職試験においてバイエル程度の独奏曲が課される場合でも十分に対応可能である。進度に応じて随時バイエルの曲を課し、学生に成長の実感を与えることも必要であろう。

3-3　成果と考察

本学幼児教育学科では、従来行われてきた教育方法を見直し、前項で述べた教育方法への転換を図った。この転換が実際にどのような成果をもたらしたのか、学生の習得状況や教育現場における実態をもとに検証する。

(1)学生の習得状況

新たな教育方法にて、筆者が過去 4 年間に担当した初心者の 1 年次学生（ピアノ未経験または初歩の段階）計 25 名を対象に習得状況を精査した。表 5 は 1 年次前期の授業週を横軸として、学生個別の習得状況を表したものである。

< 習得状況の凡例 >

●…右手で簡単なメロディーを演奏することができる。

▲…主要三和音の理解し、主要な和音進行パターンを左手で演奏できる。

■…[右手：メロディー　左手：和音　歌：歌詞]で弾き歌いができる。

★…[右手：メロディー　左手：分散和音　歌：歌詞]で弾き歌いができる。

	授業週数														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
学生 A		●				▲				■			★		
学生 B		●		▲		■			★						
学生 C		●						▲		■		★			
学生 D		●			▲		■			★					
学生 E		●			▲				■						
学生 F		●		▲		■			★						
学生 G		●		▲			■		★						
学生 H		●					▲		■		★				
学生 I		●			▲				■					★	
学生 J		●			▲			■				★			
学生 K		●		▲	■	★									
学生 L		●				▲		■					★		
学生 M		●		▲		■						★			
学生 N		●				▲		■				★			
学生 O		●			▲		■			★					
学生 P		●					▲			■					
学生 Q		●					▲			■					
学生 R		●		▲	■					★					
学生 S		●	▲	■	★										
学生 T		●						▲		■					
学生 U		●	▲	■			★								
学生 V		●		▲	■		★								
学生 W		●				▲	■						★		
学生 X		●			▲		■							★	
学生 Y		●				▲				■					

表 5　初心者の学生の習得状況(1)

①簡単なメロディーの演奏（●印）

本項は弾き歌いの導入教育の最初の段階に位置付けている内容である。ポジションを固定した状態で童謡などの平易なメロディーを右手のみで演奏できることが評価基準である。ポジションと指使いを指導することで、学生全員が 2 週目の授業（初回の実技指導時）の段階ですぐに弾けるようになっている。

②主要三和音の理解（▲印）

ハ長調のⅠ・Ⅳ・Ⅴの構成音を理解し、左手でⅠ－Ⅴ－Ⅰなどのいくつかの標準的な和音進行を演奏できることが評価基準である。本項の習得時期については 3 週目～8 週目と個人差が大きかった。また本項の習得期間は、当段階以降の習得進度と関連している。学生 S や U のように早期に習得できたケースでは、その後の段階においても速い進度で習得可能な傾向が見られる。学生 C や T のように本項の習得に時間を要する場合は、以降の段階の習得にも時間がかかり、一度覚えても継続して和音進行の練習を行わないと忘れてしまう傾向がある。

③弾き歌いの習得（■印）

[右手 : メロディー　左手 : 和音　歌 : 歌詞]で弾き歌いができることが評価基準である。両手での演奏に歌が加わるため②項と同様に習得時期の個人差は大きいが、3-2 (3)項で示したグループレッスンでの予備練習等、指導方法を工夫することで、おおむね入学後 3 カ月頃までに弾き歌いができるようになっている。

従来の教育方法では、まずバイエルがある程度演奏できるようになってから弾き歌いの指導を開始していたため、新たな教育方法の試みによって弾き歌いの習得時期の短縮化が実現したと言える。

④伴奏形での弾き歌い（★印）

上記③の弾き歌いにおいて、左手を和音から分散和音に変更し演奏できることが評価基準である。和音で弾き歌いができるようになった後、大半の学生は練習を重ねることで比較的短期間のうちに習得している。学生 K や S のように難なく習得できたケースでは、その後伴奏形を自分で工夫できるようになっている。一方、習得に時間がかかるケースもあった（学生 E・P・Q・T・Y)。伴奏形を用いることで左右のリズムの関係が混乱してしまうためである。このように、右手と共に弾くことが難しい学生に対しては、左手は和音の形で他の曲も多数弾けるようになることを優先させた。練習や実技指導の積み重ねにより最終的には伴奏形での弾き歌いを 1 年次後期のうちに習得している。

次に、1 年次前期末時点での到達度合いを示す。(表 6)

1年次前期末までに取り組んだ弾き歌いの曲の数	
20～25曲	8名（32%）
25～30曲	13名（52%）
30曲以上	4名（16%）
1年次前期末時点でのバイエルの到達度	
60番程度	8名（32%）
70～89番程度	8名（32%）
90番以上	9名（36%）

表6　初心者の学生の習得状況(2)

取り組んだ弾き歌いの曲の数については、1年次前期間中に上項①～④の段階の中で学生が取り組んだ曲の合計数である。最初にバイエルで基礎を確立してから弾き歌いに入るという従来の教育方法を採らなくとも、表6のとおり進度の遅い学生であっても平易な曲での弾き歌いを1年次前期のうちに20曲以上の弾き歌いの曲に取り組むことが可能となっている。また、授業や課題の大部分は弾き歌いの曲であっても、バイエルで用いられている伴奏形を取り入れることで同等の演奏能力の習得が可能であることを検証できた。

一般的なピアノのレッスンにおいては、課題の曲に取り組むとき、ある程度の水準で演奏できるようになるまで同じ曲を継続して取り組む方法を採るが、筆者は習得の状況に関わらず（評価基準に到達できなくとも）次々と新しい曲に取り組ませ、学生ができるだけ多くの曲に触れることを優先させている。幼児教育学科の学生に対しては、ひとつの曲の完成度に拘ることよりも、弾き歌いを数多く経験させ楽譜を読む力やスピードを向上させることのほうが、教育現場で必要となるスキルを習得する上で望ましい教育効果が得られるのである。

(2)教育現場における学生の実態

学生の教育実習先への巡回指導や、就職先の幼稚園や保育園を視察した際、学生らが授業の中で取り組んだ弾き歌いの曲を活用している様子が数多く見受けられるようになった。幼児教育の現場で実際に求められる弾き歌いの曲に数多く取り組むことや、実際の場面を想定したロールプレイング形式での授業が実際の教育現場で成果を上げていることを筆者は実感している。

(3)今後の課題

ピアノ教育は実技指導という性質上、一斉授業で行うことが不可能であるため、複数のクラスを設け、複数の教員が指導を担当する。教員間においての教育方法や実践内容に大きな差や認識の違い等が生じないよう､授業内容や指導法等について水平的な展開を行い、定期的な情報共有を行う必要がある。また、初心者の学生がよりスムーズに弾き歌いができるようになるための工夫として、例えば使用する楽譜を簡易なものに改良するなどの試

みも検討の余地がある。

おわりに

幼稚園教諭・保育士の養成を行う各種教育機関の中には、本学での従来の教育方法と類似したピアノ指導を行っている教育機関も少なくない。ピアノの基礎＝バイエルという考え方が広く普及しているために、“バイエルから始めなければ弾き歌いもできない”といった偏った概念となって教育者の見地を狭めていることが根底にあるのではないかと筆者は懸念している。2 年間という短期大学の修業年限の中で、幼児教育の現場で必要な弾き歌いの能力を習得させるための教育方法として、バイエルに固執することは非効率的である。導入教育の時点から幼児教育の現場で実際に用いられる曲を教材とし、メロディーと和音のみのごく平易な形で弾きながら歌うことが、弾き歌いの力を高めるための近道であることを提唱したい。

また、実践的な授業を展開するために、個人レッスンではなく集団での演習（グループレッスン）の授業形態を採るべきである。集団の場で演奏経験の蓄積・指導内容の共有化・ロールプレイング形式演習等、高い教育効果が得られるであろう。

幼稚園教諭や保育士を養成するためのピアノ教育法は、ピアノ教室のものとは異なり、別のアプローチが必要であることを教育者が認識すべきである。